

PISA 型読解力を育成する 大学教育カリキュラムの開発研究

— 教養ゼミ科目を事例として —

小原友行・宛 彪¹・河村哲太¹
庄本恵子¹・福井 駿¹・福田洋平¹

(2011年10月6日受理)

A Study on the Curriculum Development to Develop PISA Reading Literacy in University Education
— On the case of “Introductory Seminar for First-Year Students” —

Tomoyuki Kobara, Wan Biao¹, Tetuta Kawamura¹,
Keiko Shomoto¹, Suguru Fukui¹ and Yohei Fukuda¹

Abstract: The purpose of this paper is to develop of the curriculum and lesson for developing reading literacy skill. In order to achieve this purpose, this paper focuses on PISA reading literacy model.

In this study, (1) We build PISA reading literacy model. (2) We elaborate the curriculum plan for developing PISA reading literacy. (3) We practiced a part of the plan in “Introductory Seminar for First-Year Students”. (4) We improve the plan based on the assessment of practice.

Key words: Newspaper in Education, reading literacy, curriculum development

キーワード: NIE, 読解力, カリキュラム開発

1. 問題の所在

大学とはどのような場所で、そこで学ぶ大学生たちは何を為せばよいのだろうか。過去から様々な偉人がその答えを提示してきたが、多くの言説において共通しているのは、第一に様々な種類のスキル獲得、第二にそれらのスキルを用いて新たな見地・新たな自己を作り変えることであるという点である。

また一般的に、高等教育である大学教育は、それまでの初等・中等教育と一線を画する存在としてみなされている。それは、初等・中等教育が、基礎的な知識や技能を習得していく受身的な学習を強調する段階であったのに対して、大学教育においては、より自律的

で、より能動的な研究的な学習を強調している点での差である。

以上を踏まえて、大学教育において最も重要視すべきは何か。特に、大学教育の入門的な位置づけにある教養ゼミ科目はどうあるべきなのだろうか。

前述をまとめるならば、それは、スキル獲得であり、新たな知見と自己の作り変えに寄与するものであり、且つ自律的で能動的な研究的な学習である。そして、これらを貫く大学において先ず以って身に着けるべき能力として、本研究においては「読解」をキーワードとしたい。ここで示す読解は、物事を様々な媒体を通してインプットし、自らの視点からそれらを構造化したりし、位置づけたりすることで、目的に応じてアウトプットする、物事のインプットとアウトプットを包括した能力である。この能力は、大学の講義において

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

課せられるレポートや卒業論文、そしてその先の研究や進路においても有効な能力であると考えられる。

では、そのような能力をどのように育成することができるのだろうか。本研究では、この「読解」を育てるために、PISA 型読解モデルを用いる。PISA 型読解モデルは、単に文章の表面的な理解だけでなく、文章に込められた意図やその背景までの読み解き、そしてその発信までを視野に入れるものであり、本研究の目指すところの「読解」に合致していると思われる。

そして、この PISA 型読解モデルを通じた読解力形成において最も適した教材であると考えられるのが新聞である。新聞には、文章だけでなく、風刺画、図や写真、広告、マンガなど、様々な技法が複数組み合わせられて用いられ、その扱うジャンルも多岐に及ぶため、多様な種類のテキストを読解することができる。何より、新聞は一定の意図を以って、それを巧みに隠しながら書かれており、意図や背景を読み解くための学習に適していると考えられる。また、新聞が信頼性の高いメディアであるという点でも有効である。

以上から、本研究では、大学での学びの基礎であると考えられる「読解」を、教養ゼミ科目において PISA 型読解力形成を通してどのように育成できるかを、カリキュラムと講義開発から検討したい。そのために具体的には、① PISA 型読解モデルとはどのようなものなのか、② PISA 型読解力育成のための大学カリキュラムはどのようなものなのか、③ そのうち、PISA 型読解力形成の講義とは実際にどのように開発し、その実践から何が示唆できるのか、について論じていく。

また、本研究では新聞を教材として取り扱うが、このように新聞を教材にした教育研究や実践は、NIE (Newspaper in Education) と呼ばれている。NIE についての研究や実践では、小・中・高等学校におけるものが多く報告されているが、一方で大学生に対するものは極めて少数である。本研究は、大学生のための NIE 研究としての側面もあり、この点からもまとめて総括したい。

2. PISA 型読解モデルとは

PISA 型読解モデルとはどのような読解モデルなのだろうか。結論を先取りするならば、PISA 型読解モデルとは、①情報の取り出し(対象のテキストからテキストの言わんとすることを知る手がかりとなる情報を取り出す)、②解釈(取り出した情報をもとに、テキスト全体で述べられている内容について解釈し、規定する)③筆者の立場の確定(テキストを通して、作

者がその内容に対してどのような価値的な評価を下しているかを読み取る)、④熟考・評価(テキスト内容についての知識や体験から評価する、表現する)というプロセスを経る¹⁾、4つ段階を有する読解モデルである。このモデルはさらに、内容の理解の段階、意図の読み解きと表現の段階の大きく2つに分けられる。

内容の理解の段階では、①情報の取り出し、②解釈においてなされる。ここではまず、テキスト中からテーマに関する重要な情報が端的に読み解けるところを取り出し(①情報の取り出し)、その上でその情報を基にテキストの基本的な意味表示を明らかにする(②解釈)。

次に、意図の読み解きと表現の段階では、筆者がそのテキストにおいて、どのような立場から、何を根拠としながら論じているのかを読み解き(③筆者の立場の確定)、その上で自らの意見を表現する(④熟考・評価)。

以上のように、PISA 型読解モデルでは、内容の理解と筆者の意図や背景を知った上で、自らの意見を表現するという段階までを含む総合的な活動である。

3. PISA 型読解力を育てるカリキュラム

では、このような PISA 型読解モデルによって大学の学びの基礎を育てるカリキュラムはどのように開発できるのだろうか。ここで最も重要なのは、PISA 型読解モデルに即した読解の方法を身につけるだけでなく、実際に活用し、応用することで、真の意味で大学での学びの基礎となりうるということである。

この点を考慮し、実際に開発したカリキュラムのシラバスが表1のようになる。

本講義は大きく3つの段階に分かれる。

まず、第1～3回までにおいては、第1回において本講義で何をやるかのアウトラインを示し、第2回では大学新生がこれから大学で何を学び、何をすべきなのかについて探求し、その基礎となる「読解」スキルである PISA 型読解力の育成を本講義の目的とすることを理解する。第3回においては、具体的に PISA 型読解モデルとはどのようなモデルなのか、そしてその育成になぜ新聞なのかを理解する。このように第1～3回においては、大学で何を学ぶのか、この講義で何を学ぶのか、その位置づけを確認し、これからの大学での学びの動機づけとして機能するものである。

次に、第4～6回においては、実際に PISA 型読解モデルを用いた読解の訓練を行う。PISA 型読解モデルは、内容の把握に留まらず、その意図や背景まで読

み解くことに特徴を持つ。本講義の教材である新聞においては、いくつかのスタイルのテキストが存在するが、中でも、風刺画、社説、一般記事を用いる。これらのテキストは、社会の論争的な問題を取り上げ、そこには意図や背景を多分に含んでいる。また、風刺画→社説→一般記事の順で学ぶことで、意図や背景がわかりやすいものから、読み取りづらいものへと段階的な読解スキルの育成が可能になる。

これらの訓練を通してテキスト読解のスキルを身につけた後、より実践的な読解体験をしていく。それが、第7～15回であり、ここではグループ活動を基礎として行う。まず、第7～8回ではグループごとに読み解き、考えていきたいテーマを設定する。その後、9～13回においてPISA型読解モデルの読解の4段階に即して読解を行い、最後に14～15回において報告会を行う。

以上の3つの段階を踏まえて、大学での学びの基礎となる「読解」スキルを獲得していくカリキュラムは展開される。

表1 講義シラバス

講義の目的・計画
本講義は、全学部共通の教養ゼミとして1学年前期に開講される。
本講義の目的は、物事のインプットとアウトプットを通して、読解スキルを身につけること、である。
大学生は、読解がより多く求められる。それは、卒業論文や講義をはじめ、研究活動全般において読解が重要な地位を占めているからである。そこで、本講義では、大学生に求められる読解スキルを取得できることを目標と据えている。
では、具体的にどのようなスキルを身につけることが有用なだろうか。本講義においては、PISA型読解力の習得を目指す。具体的には、PISA型読解力モデルを用いて、新聞を読解する。その際、①風刺画、②社説、③一般記事の順に、読解する記事を、はじめは価値的なものが明示的なものから読解していき、より隠しているものを段階的に読んでいく。そして、これらのインプットの訓練を積んだ後、表現したものの発信やそれを根拠とした行動などのアウトプットも本講義では扱う。
講義計画
<第1回> 本講義のアウトライン
<第2回> 理論1—大学教育の目的と本講義の目的—
<第3回> 理論2—PISA型読解力による読解と新聞—
<第4回> 風刺画の読解
<第5回> 社説の読解
<第6回> 一般記事の読解
<第7回> 自由研究①—テーマ決定・データ収集—
<第8回> 自由研究②—データ収集②—
<第9回> 自由研究③—テキストの内容把握—
<第10回> 自由研究④—テキスト作成者の意図を読み解く—
<第11回> 自由研究⑤—テキストの評価—

<第12回> 自由研究⑥—評価の表現—
 <第13回> アウトプット—発信・行動—
 <第14～15回> まとめ—インプット→アウトプットの
 結果を報告する—

4. 講義開発・実践・改善

(1) 講義の開発

上記のカリキュラムをより実証的に吟味するために、実際に大学の講義を行った。対象は教養ゼミ科目を履修する大学2年生で実施した。ここではまず、実践を行った講義についての説明を行う。

開発した講義は、左記の講義計画の中の第5回「社説の読解」にあたる。ここではさまざまな種類の新聞記事の中でも社説に焦点を当て、社説をPISA型読解モデルに即して読解することができるようになることが本時の目標となっている。ではその講義の全体の展開はどのようになっているのだろうか。

まず、導入部分で「読解」について学生がどう考えているかを把握する。その上で、今回扱うPISA型読解モデルの特徴とその具体的な中身を説明する。この導入部分は本来の講義計画に基づけば第1～3回目の授業で講義がなされ確認されている事柄であるが、今回実践に使うことができた時間が1時間分であったために、事前の指導を受けていない学生に1～3回目の授業を追体験させるために時間を設けた。

そして展開1では、実際に社説を用いてPISA型読解モデルに対応する形で記事の読解を進めていく。具体的にはモデル①情報の取り出しにおいては、学生が本文を読み、各段落のトピックセンテンスに線を引くことを行う。ここで、社説を読みテキスト全体が言わんとすることを知らずの手の手がかりとなるセンテンスを引き出す作業を行う。この作業をすることで次の展開でテキスト全体の内容を把握する準備となる。

展開2では、ひとつの記事全体で述べられている内容をまとめる作業を行う。そこで展開1で行った情報の取り出しを手がかりに個々の文章をひとつのまとまりとして再構成する。この作業が読解モデル②解釈となる。この段階を経て社説は一つのまとまりのある内容を持つテキストとして受講者に学習される。

展開3では、読解モデル③筆者の立場の確定の段階である。前の展開でひとつの社説の内容を確定したあと、社説を書いた筆者がどのような論点でどのような立場に基づいて自らの主張を展開しているのかを確定するために、筆者が社説を書くに当たってあらかじめテーマに対してどのような「問い」を設定して文章を書き、それをどのように答えているかを書かせる。

その上で、さらにその筆者の主張を吟味するために本授業のMQとなる問い「海上保安官に非があるのか。また保安官だけに非があるのか」を導き出す。(この部分が記事Ⅰの④熟考・評価と対応する)

次の展開4では、展開1～3で扱った記事Ⅰに関連することが書かれた別の新聞社の社説を、また同じようにPISA型読解モデル①～③に基づいて読解する。そこで読解する記事は記事Ⅰとは異なる論調を持っており、記事Ⅰだけでは示されなかった視点から述べられたものである。それら二つの異なった論調を持った記事を読解することで、展開1～3で扱った記事を批判的に読み直し、はじめに立てたMQに答える際の手がかりとする。ここでも展開1～3と同じようにPISA型読解モデルの①～③が二つの異なる論調の社説の読解に用いられることになる。

そのあと、それぞれの社説の主張をもとにして、展開1で示したMQに立ち返って、自分の考えを表す。(④熟考・評価)ここでは、それぞれの立場が明らかにされた3つの社説にみられる主張を参考にして既存の知識も総合して自らの意見を出し合う。そのようにして意見を出し合い相手の意見を聞くことでさらに自分の考えを深めていく。

上記のシラバスの目標でも述べたように、本時の目標はPISA型読解モデルに即して社説を読解することで読解スキルを身につけることとなっている。そのため、本授業実践は読解モデルの順序性を意識した展開となっており、実際に学生たちに作業を体験させながら授業を進めることでスキルを身につけさせることを意図している。このようなことが意図された学習指導案の概案を以下に示す。(細案とワークシートは資料編参照)

表2 第5回授業の学習指導案の概案

展開	概要	PISA型読解モデルとの対応	形式
導入 (10分)	本講義の目的、PISA型読解モデルの概要と読解段階の説明		講義(PISA型読解モデルの理解)
展開1 (15分)	学生が本文を読み、各段落のトピックセンテンスに線を引く。	第1段階 情報の取り出し	活動
展開2 (20分)	学生がトピックセンテンスから全体の意味を捉えて、200字以内で要約。	第2段階 解釈	活動
展開3 (10分)	学生が社説の筆者がどのような「問い」を設定して文章を書き、それにどう答えているのか、を書く。	第3段階 筆者の立場の確定	活動

展開4 (30分)	学生が社説に設定された「問い」に対して、社説2,3やグループや他のグループとの意見交換から意見を述べる。	第4段階 熟考・評価	活動
終結 (5分)	PISA型読解モデルの読解方法の振り返りと、今後への活用の示唆		講義 (まとめ)

(2) 実習の成果・改善点と改善策

上記のような授業を、広島大学2年生34名(教育学部第2類社会系コースの学生が主)を対象に、2010年12月13日3・4時限に行った。そして、そのアンケートを行った結果として反省点が2点まとめられた。

- (i) PISA型読解モデルの第4段階(熟考・評価)における議論があまりできなかった。
- (ii) PISA型読解モデルの1～2段階、3段階において、同じことを繰り返している印象がある。

学生のアンケート調査には、今回習得したスキルを用いることで、今後の新聞・文章の読解の際に役に立ちそうだという意見もあった一方で、議論の時間が少ないことを指摘する意見が多く出た。この議論の段階は読解モデルの④熟考・評価にあたり、読解スキルを身につける上で最後の段階である発信・行動といったアウトプットの段階にある。PISA型読解モデルでは単にテキストの内容や意図を読み取るだけでなく、そのテキストをほかのテキストや自分の知識を総合して評価し、表現を行うことまでを読解のプロセスにおいており、本時ではその段階を議論の場として組織しているため、この議論の時間を十分に確保することが本時の目標を達成するために必要なことであると考えられる。

(i) 議論があまりできなかったという課題の原因は、時間の不足である。そのためには、(ii) 同じことを繰り返していた、という点を改善することで第4段階において議論したり、他のグループの意見を聞いたりする時間が確保できると考える。

そもそも本講義の目的は、PISA型読解モデルに即した読解ができるようになること、であった。そのために、講義においてPISA型読解モデルの段階性に沿って実際に学生たちが体験するという活動を通して、読解スキルを獲得できると考えた。そのために、先の概案のように、授業展開はPISA型読解モデルと対応した形で活動をしていくという計画を立てていた。しかし、実際には、活動を各段階において繰り返すことによって、同じようなことを繰り返すという問

題、また、各活動に時間がかかりすぎるといった問題が露呈してしまった。これを改善するために、各段階はPISA 型読解力モデルの4つの段階に即すが、講義の形式を各展開で代える。ここではつまり、展開1～2(情報の取り出し、解釈)を講義(1,2段階の追体験)に変えることで改善を図りたい。展開1～2を講義形式にし、作業の時間を短縮することで、展開4で行う他社の社説の読解と自らの意見を述べ議論する時間を十分に確保できるというメリットが生じる。

表3 学習指導案の改善案

展開	概要	PISA 型読解モデルとの対応	形式
導入 (10分)	本講義の目的、PISA 型読解モデルの概要と読解段階の説明		講義 (PISA 型読解モデルの理解)
展開1 (10分)	学生は本文を読み(5分)、その後、授業者が各段落のトピックセンテンスを抜き出し、学生はその様子を見ることで追体験する(5分)。	第1段階 情報の取り出し	講義 (1段階の追体験)
展開2 (5分)	授業者が取り出したトピックセンテンスを元に、200字以内で要約する。学生はその様子を見ることで追体験する。(5分)	第2段階 解釈	講義 (2段階の追体験)
展開3 (10分)	学生が社説の筆者がどのような「問い」を設定して文章を書き(5分)、それにどう答えているのか(5分)、を書く。	第3段階 筆者の立場の確定	活動
展開4 (50分)	学生が社説に設定された「問い」に対して、社説2,3を参考にグループで議論し、意見をまとめる(35分)。その後、他のグループとの意見交換から違う視点を共有する(15分)。	第4段階 熟考・評価	活動
終結 (5分)	PISA 型読解モデルの読解方法の振り返りと、今後への活用の示唆		講義 (まとめ)

5. まとめ—成果と課題—

本研究では、大学での学びの基礎となる「読解」スキルとしてPISA 型読解力育成を取り上げ、どのよう

なカリキュラム、講義においてその形成が可能かを検討してきた。

本研究では講義計画に基づいたカリキュラム、講義開発、講義実践にまで言及できたという点が成果として挙げられる。そして実践後の感想などを基にした反省から、学習展開の修正を提案するにまで至った。今後このような実践からデータ収集、授業改善を繰り返していくことで研究の蓄積を行う必要があるだろう。なお今回は学習展開の修正にとどまったが、カリキュラム全体のことを考えると、今後は教材選択の原理を明らかにすることで、PISA 型読解モデルを効率的に生徒に身につけさせるための教材とはどういったものかを究明する必要もあろう。

一方で、「大学でこそ身につけるべき能力・スキルとは何か」という点から考えると、今回取り上げたPISA 型読解モデルによる新聞記事の読解スキルは、「大学生が身につけていることが期待されるスキル」であることは予想されるが、「大学でこそ育てられるべき能力・スキルであるか」ということには議論が残るところであり、今後の課題としたい。

また、NIEという観点から本研究を振り返ると先述と同じような課題が挙げられよう。本研究において、大学生としてのNIEとして、カリキュラム開発、講義開発・実践を実際に行ったことに意義があると考えられる。しかし、一方でその実践した講義がこれまで中学校、高等学校で研究・実践されてきたものとあまり変わらず、大学生のNIEとしての新しさを提示できなかった。この原因は、先にも述べた通り「高校までとは違う、大学でこそ身につける能力・スキル」とは何かをはっきりしなかったことが挙げられるだろう。この点からも、「大学でこそ身につけるべき能力・スキル」について今後も考えていかなければならないだろう。

【参考記事】

- ・2010年11月19日 日本経済新聞朝刊2ページ
- ・2010年11月18日 読売新聞朝刊
- ・2010年11月17日 朝日新聞朝刊3ページ

【注】

- 1) 有田秀文『必ず「PISA 型読解力」が育つ七つの授業改革—「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」を育てる方法—』2008 明治図書

資料編 1

第5回授業の学習指導案細案

時間	主な質問等	教授・学習活動	資料	学習内容
導入	<p>・新聞記事を「読解する」とは どうことをいうのだろうか。</p> <p>・今日取り扱う PISA 型読解モ デルでは先にあげた「読解」と はどこが違うのだろうか。</p> <p>・PISA 型読解モデルとは具体的 にはどういったものだろうか。</p>	<p>T：資料配布 T：質問する S：答える T：説明する</p> <p>T：説明する</p>	<p>ワーク シート</p> <p>パワー ポイント を使用</p>	<p>・読み解く、文章の内容を理解するなど・・・</p> <p>・ただ単純に文章の内容を理解するだけでなく、そ の文章を作った作者の意図、価値観まで把握し、そ の上で自らの主張を表現することまでが「読解」に 含まれていること。 ①情報の取り出し、②解釈、③熟考・評価（1）、 ④熟考・評価（2）という4つのプロセスをふんで 読み進めていく</p>
展開 1	<p>・PISA 型読解モデルに合わせて 実際に新聞記事の読解を進めて いく。</p> <p>・まずはこの記事を読んで、段 落ごとに重要な文に線を引こう →①情報の取り出し。</p>	<p>T：質問する S：答える</p>	<p>記事 I</p>	<p>・各段落で、1文（or 2文）で文章を抜き出す。</p>
展開 2	<p>・①で行ったことを踏まえて、 この記事全体で述べられている ことをまとめると何だったのだろ うか。→②解釈</p>	<p>T：質問する S：ワークシー トに記入</p>		<p>・警視庁、東京地検は、流出を認めている海上保安官 の逮捕を見送った。今回警察・検察が逮捕しない理由 として、逃亡の恐れがないこと、組織的犯行の可能性 がほぼ消えたこと、映像が嘉穂内部で秘密扱いされて いたか疑問が出てきたこと、衝突事件容疑者の身柄の 扱いとバランスを取る一などが考えられる。</p> <p>・一方で、この保安官の行動は、内部告発とは評価 しづらく、公務員が政府の方針を覆したということが が問題として重視されるべきである。正義を実現す るためには正義にかなう手段をとるべきだった。た だし、情報を知る権利という民主主義の原則を考え ると、映像の全面公開はすべきである。</p>
展開 3	<p>・筆者は、この社説をどのよう な問いを設定して書いている か。（この社説がどのような問い の答えになっているのか）</p> <p>・筆者はこの記事を書くことで 何を主張したかったのだろうか。 記者の主張はなんだろうか。</p>	<p>T：質問する S：ワークシー トに記入・ 発表する</p> <p>T：質問する S：ワークシー トに記入・ 発表する</p>		<p>・大きな問いとしては、「保安官に非はあるのか」 であり、その下位の問いとして、「保安官の法の上 での非（刑事責任）はあるのか」「保安官が映像流 出をしたことの非はあるか」「保安官だけに非があ るのか」があると考えられる。</p> <p>・逮捕見送りの捜査当局の判断に否定的でなく、暗 に妥当と捉えている。一公務員として、国の方針に 従わなかったことに非がある。正義にかなう手段を とるべきであった。また、国民の知る権利の点から 映像は初めから公開すべきで、政府にも非がある。</p>
展開 4	<p>◎それでは、あなたは「保安官 に非がある」と思いますか。社 説Ⅱ・Ⅲを参考に考えましょう。 →④熟考・評価（2）</p>	<p>T：質問する S：ワークシー トに記入・ 発表する</p>		
終結	<p>・今日の目標は、PISA 型読解モ デルを意識しながら文章を読む ことで、文章のよりよい読み方 を身につけることであった。こ の読み方を参考にして今後の大 学生活をよりよいものにしてい こう。</p>	<p>T：まとめる</p>		

- ③社説Ⅰは、どのような「問い」を設定して書かれていますか？（**第3段階**に該当）
（社説Ⅰは、どのような「問い」の答えとなっているか？）

- ④社説Ⅰの筆者は、この「問い」にどう答えていますか？（**第3段階**に該当）
（筆者の主張は何か？）

- ⑤社説Ⅰで設定されている「問い」（ ）に対して、あなたはどのように考えますか？
（**第4段階**に該当）

※ここからは時間があつた場合にのみ書きます。

5. 社説Ⅱ・Ⅲの読解

①社説Ⅱと社説Ⅲに設定されている「問い」と、それに対してどのように答えているか（筆者の主張）を書きなさい。

<社説Ⅱ>

(1) 社説Ⅱの問い

(2) 社説Ⅱの筆者の主張

<社説Ⅲ>

(1) 社説Ⅲの問い

(2) 社説Ⅲの筆者の主張